

# 地誌学をめぐって

村 上 誠\*

## A Perspective on Regional Geography

Makoto MURAKAMI\*

### 目 次

まえがき	IV. 地誌学の成果
I. 地誌学の現状	V. 隣接科学, 特に地域研究をめぐって
II. 地誌学の歩み	あとがき
III. 地誌学のもつ課題	—広島大学総合地誌研究資料センターと地誌学—

### まえがき

21世紀を前に、国際化はその質と広がりをもますます進め、世界各地の情報や知識をより早く且つより正確に獲得し、集積し、利用する学問が求められる時代に入った。こうした時代を迎えて、地誌学の役割は非常に重要になってきたと考えられるが、しかし、こうした時代のニーズに対応できるものであろうか。地誌学は、長い歴史をもつ学問であるが、今日に生きる科学としてその基盤は必ずしも強固なものではないように思える。それがどういふことなのか、またどうして起こったのか、地誌学と周辺科学の過去を振り返り明日を睨みながら、以下に若干の私見を述べてみたい。もとより、ここで地誌学と周辺科学とを網羅的に取り上げて検討するつもりはない。あくまでも、いくらかの文献を挙げるとしても、地誌学の新しい傾向を示すためであり、あわせて、隣接するディシプリンへの、そしてそれからの地誌学への正しい理解を進めるためである。それが広島大学総合地誌研究資料センターにおいて教育研究の一端を担う者としての勤めでもあろうかと思うが故である。

### I. 地誌学の現状

我が国におけるこうした地誌学の立ち遅れの理由はいろいろあろうが、何よりもまず地

---

\* 広島大学総合地誌研究資料センター長；Director, Research Center for Regional Geography, Hiroshima University

理学自体の中にそれを求めねばならない。いきなり自己批判であるが、理由の一つは日本の中等教育における地理の取り扱い方にあったのではなかろうか。すなわち、そこでは、地理は「何は何処にある」、「何処には何がある」式の暗記科目になり、今日の国民一般の地理についての理解もそれを基にして形成されているということである。国民一般の「地理的」という表現が単に場所を示す意味として理解されているのも、そこからきているといえよう。また2番目には、地理学の研究に従事する者自身も、一人である地域の地誌を作り上げるのが困難なために、いきおい、個人で調査して——実際はそれも少なくなったが——分析できる系統地理を進めてきたこと、および地誌の方法論がなお不明確であることなどが挙げられる。

そうした理由のほかに、隣接科学——ただしこれは地理学者だけがそう呼ぶのかもしれないが——の中に、「地域云々」と地域を付したディシプリンが多見されるようになり、地理学者の多くはこれも地理学の一つの分野と位置づけてきたことが挙げられる。その際、今や日常語となった「地域」と、固有の術語として厳密に概念規定をする「地理的地域」とを明確に区別することが重要であろう。ただ地誌地域のもつあいまいさについては、後に取り上げる。

## II. 地誌学の歩み

いまさらの感はあるが、上記の意味あいから、地誌学の性格づけの意味で若干の説明を加えることをお許し願いたい。18世紀の後半から、地理学はそれまでの殻を抜け出し、新しい科学への道を模索してきた。しかして、それまでの道とはなんであったのか。地理学は遠くギリシャに発するが、当時はエーゲ海の彼方の地を紹介するのが地理学のおもな役割であった。すなわち、ナイル世界やメソポタミア世界などにおけるあらゆるものを紹介したが、その中には当然、地形学、気候学、生物学などはもとより、人々の生活を紹介するために農学や食物学、社会の仕組みについての政治学や社会学、人体についての医学、環境についての天文学、測量学などあらゆるものが含まれた。ヘレニズム時代に知見はインド世界にまで広がり、P. マルコの東洋旅行がやがて地理上の発見をもたらした。しかし、その成果たるコスモグラフィアもそれまでの地理学を打ち破るものではなかった。ただし、新しい知見の限界が見えてきたところで、地理学はそれまでの「何処に何がある」から、「何故そこにあるのか」へと科学としての方向を模索し始めた。隣接科学の発展と独立によって、地理学の固有の研究領域が限定されてきたこともあった。

地理学はそのために、人類の諸活動の地域的展開をいろいろなスケールで追いかけて始め

た。これが系統地理学 (Systematic Geography) である。しかし、地理学は地球上に展開する人類の諸活動をそれぞれの場ごとに説明する伝統的な分野を地誌学 (Regional Geography) として持ち続けてきた。それは、多様なスケールの地域についての地域的特性を求め、最終的に世界の地域的特色を明らかにしようとする地理学の本来的使命に基づくものであり、自ずと系統地理学の諸成果を統合する器でもあるからである。

### III. 地誌学のもつ課題

地誌学がもつ今日的課題を考える際に、長谷川 (1994) も指摘するごとく、次の3点が重要であろう。第1には、近代地理学の誕生以来、その理論的柱となってきた環境論との関係である。19世紀末、環境論が地理学近代化の旗手として登場して以来、地誌学もまた、自然環境をふまえて人間の諸活動を網羅的に取り上げ、地域性の把握と説明を試みてきた。しかし、自然環境と人間の活動との関係は、系統地理と同様に地誌にも持ち込まれ、爾来多様な努力が続けられてきたが、なお地誌学でも歴史的課題である。

第2には、上記とも関連するが、地誌学が、取り上げる地域をどう説明するか、いわば地誌の内容の構成についてである。伝統的な系統地誌では、まず全体を総説という形で、位置・地形・気候・動植物などの自然、人種・人口など住民、歴史、産業、国家・社会、農村・都市など集落、言語・宗教など民族…等々を取り上げ、次に幾つかに分けた地方誌でも、おおよそこの順序で詳述していく。これらの、いわば当該地域を特徴づけるための項目は、機械的に並べたように見えるけれども、相互の項目間に因果的関連性を含めたものであるとされてきた。すなわち、自然的条件の間にはもとより、その上に展開する人間の活動も自然条件との間に、そして人文的諸活動の間にもである。ただそこには、地理学が背負う環境論という歴史的課題が付きまとう。また網羅的記述によって、各地誌地域が客観的に性格付けられるかどうか、項目の立て方の問題もある。

こうした系統地誌に対して、今次大戦前後から、動態地誌学 (Dynamic Geography) が興ってきた。これは、H. Spethmann (1928) によれば、地域を構成するあらゆる要素 (項目) を全て取り上げるのは困難であり、こうした形式的な取り扱いではなく、対象地域に卓越する機能や現象を取り上げ、それらと深く関わる要素とそれらの間の関係から地域的特性を説明するというものである。ただし、この場合には要素の抽出と、要素についての研究と総合的把握との間の整合性が問われてきた。

第3には、取り上げる地誌地域についてである。世界地誌を記述する際の単位は、多くが大陸単位となり、けだしこれを大地域の州別地誌とみることができる。州別地誌の構成

は、国家を幾つか束ねたインド亜大陸などのような範囲から国家ごとの地域単位までのいわゆる中地域の地誌となる。国家の例を日本にとれば、さらに地方、県・市町村と、いわば小地域の地誌地域へと分けられる。系統地誌におけるこうしたいわば政治・行政地域を地誌地域とすることの意味・意義が問われてきた。これに対して近年の動態地誌では、政治地域や自然地域をベースにした地誌地域から文化地域へ乗せる地誌が多くみられるようになってきた。その場合、どのスケールの地誌地域まで文化的ファクター中心に説明できるかが問われよう。またこうした地方地誌を空間的に拡大して、世界地誌にまで如何に繋げていくかも問われよう。

#### IV. 地誌学の成果

従来の地誌学の大きな流れの中心が伝統的な系統地誌学であることから、まずその方からみたい。この流れをひく近年の地誌研究の成果の一つとして、田辺裕監修・訳(1996)の『図説大百科 世界の地理』24巻を挙げることができる。そこには「世界旅行への招待」とある如く、啓蒙の意味が示されているが、代表編者の P. Hagett も政治や経済や環境など激変する世界を正しく理解するためにと述べており、翻訳者も「そこはどんなところか」という地誌の原点をふまえている。さて、まず取り上げる地域の区分については次の22地域で、アメリカ合衆国、カナダ・北極、中部アメリカ、南アメリカ、北ヨーロッパ、イギリス・アイルランド、フランス、ベネルクス、イベリア、イタリア・ギリシャ、ドイツ・オーストリア・スイス、東ヨーロッパ、ロシア・北ユーラシア、西アジア、北アフリカ、西・中央・東アフリカ、南アフリカ、南アジア、中国・台湾・香港、東南アジア、日本・朝鮮半島、オセアニア・南極である。これについては「地理上の区分(南アメリカや北アフリカ)と政治的な単位(アメリカ合衆国やフランス)によった」とあるごとく、必ずしも州別次いで国別とはなっていない。次に、それぞれの地域を記述する共通の項目として、自然地理、生息環境とその保全、動物の生態、植物の生態、農業、鉱工業、経済、民族と文化、都市、政治、環境問題の11項目と参考データを挙げている。この構成は、系統地誌をほぼ踏襲しているといえよう。

これに対して、動態地誌では、取り上げるテーマによって、地域要素・項目と地域区分は変わってくる。そうした中で、まず政治・経済を中心にした最近の動態地誌の例として、J. Cole の “Geography of World's Major Regions” を挙げることができる。この中で Cole は、近代以降のヨーロッパの植民地政策とその経過を振り返り、人口や経済の推移にふれた後、ヨーロッパ、旧ソ連、日本・韓国、アメリカ合衆国、カナダ・オセアニア、

ラテンアメリカ、サハラ以南のアフリカ、北アフリカと南西アジア、南アジア、東南アジア、中国とその近隣などと区分した。これらの構成は今日の世界を政治や経済を視点にして捉えた上での区分といえる。次に文化を指標とした例として、R. J. Russel と F. B. Kniffenn (1951) による“Culture World”をみる。ここでは、世界を、ヨーロッパ世界、オリエンタル世界、乾燥世界、アフリカ世界、極地世界、アメリカ世界、太平洋世界の7地域に区分した。これは自然地域に文化を重ねたものである。

こうした大地域は、具体的にはまず全体の性格付けをしたあと、その項目に沿って、中地域に分けて記述される。これをまずアジアについての系統地誌についてみれば、L. D. Stamp (1967) の“Asia, A Regional and Economic Geography”を挙げることができる。その中で Stamp は、項目としては、概観——多様性に富む大陸——，山地，地殻構造，気候，植生，人口，ヨーロッパの進出，世界におけるアジアの位置の8項目を挙げ，地域としては，西アジアのアラブ地域と東南アジアで複数の国を含め，チベット・中国の東北を中国とは別途取り出した以外は，それぞれの国家とソヴィエトアジアの18地域に区分した。この地域区分はいわば中～小地域の混合した地誌地域といえよう。また G. B. Gressey (1963) は，“Asia's Land and People”で，自然条件から59の地域に区分したが，これは必ずしも地誌地域とはいえない。

これらに対して，動態地誌の例として上述した R. J. Russel らによる，文化指標をもとにしたオリエンタル世界の中地域区分を挙げてみたい。彼らはこの地域を Realm と呼び，India Realm, Chinese Realm, Indo-Chinese Shatter Belt, Malayan Realm の4地域を抽出した。これはインドおよび中国の2つの文化圏を基軸にそれらの拡大や接触地域に分けたもので興味深い。また人種・民族を中心とした政治地理的視点から，W. G. East と O. H. K. Spate (1950) は，“The Changing Map of Asia”で，南西アジア，インド・パキスタン，東南アジア，極東，高原アジア，ソヴィエトアジアの6地域を設定した。ただこうした中地域の動態地誌も，小地域になると中地域で示した項目に沿う記述はできなくなるという問題をもつ。

しかして，こうした地誌の諸成果は，地誌学の課題を克服したものであろうか。なお試行錯誤が続いているというのが妥当ではなかろうか。

## V. 隣接科学，特に地域研究をめぐって

地誌学が世界の諸地域を如何に特色づけるかを模索している中で，地理学の地域スケールの束縛から離れて人類学が飛び立ち，特に地域発展という課題を担って地域研究が船出

していった。このうち、地域研究がアメリカで興った背景やその後の発展の過程はここでいまさら説明の必要はなかろう。

日本における地域研究は、ミシガン大学日本研究センターが、R. B. Hall (1959) を中心にした岡山県新池での調査研究で洗礼を受け、1960年代に入って日本人による東南アジアなど発展途上国の地域研究が始まった。これは折りからの経済成長によって、当該地域への経済進出に附いて行ったものである。その後対象地域は次第に広がった。こうした動きは、1960年のアジア経済研究所、1964年の東京外国語大学AA言語文化研究所、1965年の京都大学東南アジア研究センターなどの設立からもうなずけるところである。広島大学においても、総合地誌研究所の設立を計画し、日本学術会議から設置の勧告を受けたのが1967年のことである。当時我々の意識では、地域研究も地誌研究もめざすものに、基本的に差はなかったように思う。それは、当時市川(1983)など地理学研究者の多くは、地域研究を極く近い応用地理学の一分野と位置づけ、積極的にそれへの取り組みを行なったことから明らかである。しかし、地域研究を立ち上げようとする分野では、独自の対象地域とそれへのアプローチの方法の確立が課題で、それへの模索が続いた。そうした中で、文部省は地域研究について学術審議会に学術国際交流特別委員会を設け、1981年3月に、「地域研究の推進について」という審議結果を公表した。その中で「地域研究は、ある地域について、自然環境を含めてその社会・文化を全体として深く理解することを目的とする学術的、総合的な研究」といっている。これをみる限りにおいては、地域研究と地誌学の違いは出てこない。

地域研究を進める分野では、その後、豊かな資金にも支えられて上記機関を中心にして積極的に研究活動を進めてきた。その研究成果の中の幾つかの例を示そう。山口博一(1991)は、地域研究を社会科学特に経済学の立場から、経済発展をめざす途上国・地域を、その目的に即して総合的に研究するものと限定した。矢野暢・高谷好一(1993, 1994)は、世界単位論の中で、地域研究の対象地域を、民族・文化的概念を加味して「人々が世界観を共有する範囲で、生態・風土・周辺との関係を重ねていくことによって得られる社会空間」と規定し、その学際的研究が地域研究だとした。こうした流れから、地域研究など隣接科学の学問的アイデンティティの確立は、同じような研究対象と研究方法をもつ地誌学から如何に離れるかにかかっていたように思われる。ただ、矢野も指摘するように、地域研究の方法論はなお模索の段階にある。

## あとがき —— 広島大学総合地誌研究資料センターと地誌学 ——

地誌学は、かくのごとく、内には自らの学問的アイデンティティの高揚を進めながら、外には地域を冠する幾つものディシプリンに囲まれて、それらとの協調を以って生きてきたし、今後もそうであろう。本センターもまた、そうした性格はいなめない。しかし、地誌研究の本来的特質に立ち戻って、広く隣接科学を包含し、それらの中心的機能を担うところとしての自覚と役割をもたねばならない。その日の早からんことを願っている。

本稿は、過日持たせていただいた最終講義の原稿へいくらかの加除を加えたものである。

## 文献

- 市川正巳（1983）：『地域研究 発展途上国との学術協力の現状とその在り方に関する基礎的研究』文部省科学研究費総合研究(B)報告書。
- 高谷好一・矢野暢（1993）：地域研究とは何か、「地域」とはなにか。『地域研究の手法（講座 現代の地域研究 1）』弘文堂，pp. 1～45。
- 高谷好一・矢野暢（1994）：世界単位を考える。『世界単位論（講座 現代の地域研究 2）』弘文堂，pp. 1～23。
- 田辺裕監修・訳（1996）：『図説大百科 世界の地理』全24巻，朝倉書店。
- 長谷川典夫（1994）：『地誌学—地誌作成法とその実例—』大明堂，pp. 7～34。
- 山口博一（1991）：『地域研究論（地域研究シリーズ 1）』アジア経済研究所，172 p。
- Robert, B. Hall の後を受けて Beardsley, R. K., J. W. Hall and R. E. Ward (1959): *Village Japan*. Chicago Univ. Press, Chicago.
- Cole, J. (1996): *Geography of World's Major Regions*. Routledge, New York.
- East, G. and O. H. K. Spate (1950): *The Changing Map of Asia, A Political Geography*. Dutton, New York.
- Gressey, G. B. (1963): *Asia's Land and People*. MacGraw-Hill, New York, 3rd edit.
- Russel, R. J. and F. B. Kniffen (1951): *Culture worlds*. London.
- Spethmann, H. (1928): *Dynamische Landerkunde*.
- Stamp, L. D. (1967): *Asia, A Regional and Economic Geography*. Methuen and co., London.